

聖書では一般に人間の内面の心の動きに無関心です。人間の内面に人々の関心が向けられるようになったのは、ヨーロッパで市民革命が起こって、個人が私有財産権を持っていると考えられるようになってからです。私有財産は国家権力でも不当に奪うことはできない固有の権利であると考えられるようになったことで、個人の内面の心も不可侵なものと考えられるようになって、個人の内面の心の動きに関心が向けられるようになったのです。

ですから、福音書の中でも人間の内面の動きには基本的に無頓着で、怒ったとか喜んだなどの内面の心の動きに関わることも、単に表面的な行動が描写されるだけで、内面の描写と言うものが描かれることはないのです。

本日のヨハネ福音書の記事は有名なラザロの蘇りの個所ですが、私たち近代人の感覚で養生人物たちの心情というものに焦点を当てすぎると、本来福音書記者が伝えたかったことを見逃してしまう危険性があるということを最初に指摘させていただきたいのです。

20節以下を見ると、ラザロが死んで4日経ってから、イエスが来られたことを聞いたマルタは、すぐに出迎えに行きました。一方、マリアはイエスが来られたことを聞いても、家に座っていました。イエスを出迎えに行ったマルタは「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と言いました。さらに続けて「しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています」と言います。イエスが「あなたの兄弟は復活する」と言うと、マルタは「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」と応えしました。この言葉は、イスラエルの伝統的な復活理解の言葉です。最終的な裁きの時に、義人は復活¹するという考え方です。このマルタの言葉に対して、イエスは「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか」と問いかけます。そして、マルタの信仰告白の言葉が導き出されるのです。「はい、主よ、あなたが世に來られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております」と言うのです。このようなやり取りがあつて、本日の聖書個所になるのです。マルタは、家に戻ってから姉妹のマリアを呼び、「先生がいらして、あなたをお呼びです」と耳打ちしたのです。マリアはこれを聞くとすぐに立ちあがり、イエスのもとに向かったのです。マリアはイエスを見るなり、足元にひれ伏して「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟はしななかつたでしょうに」と言い募ったのでした。この32節の言葉は、マルタが21節でイエスに対して言った言葉と同じです。

マルタもマリアも、イエスさえ、病床で死にかけているラザロのところに来ていてくれたら、シムコとはなかつたはずだと思っていたのです。唯一、違いは、マルタはイエスが神に願うことは何でも神はかなえてくださると言う言葉を語っている点です。

これに対してマリアはイエスがラザロの死に際においてくれれば、病気を癒して命が助かつたはずだと考えていたようです。しかし、それも今となっては遅きに失したのです。だから、マリアと一緒にマリアの後に付いてきたユダヤ人たちと一緒に泣いているのです。

その様子を見ていたイエスは、心に憤りを覚えて、興奮して、言うのです。「どこに葬つたのか」。そして、ラザロの墓のところに来ると、イエスは涙を流されたのでした。近代人の感覚で言うと、ラザロの墓の前に来て、イエスが死んだラザロの墓の前で悲しんで涙を流されたように受けとめてしまいます。けれども、そういう個人的な悲しみの表現として、イエスが涙を流されたわけではな

いでしよう。マリアや慰めに来ていたユダヤ人たちはラザロが死んだことが、神の恵みの力から切り離された絶望的な状態だと考えていたからでしょう。当時のユダヤ人たちは敬虔な信仰生活をしていてもかかわらず、神の力によって復活させられることを諦めていたのです。その意味でマリアも追悼に来ていたユダヤ人たちと同じ考えに捕らわれて、ラザロの死を悲しんでいただけなのです。

さて、もう一度、マルタと比較してみましょう。マルタは最初、イエスが病床にあるラザロのところに生前に来ていくれたなら、危機的な病状を癒して命を助けてくれるだろうという思いを抱いていました。しかし、マルタは、イエスが神に願うことは何でも神がかなえてくださることを信じているとイエスに言っています。ところがマリアは、イエスがラザロの生前に来てくれれば、ラザロが死ななかっただろうと、マルタと同じことを言っているのですが、そこでイエスと神との関係についての視点は持ち合わせていなかったのです。

イエスがマリアやユダヤ人たちが泣くのを見て、心に憤りを覚えて興奮したのはなぜかということがわかって来たと思います。イエスはラザロが死んで悲しんで涙を流したのではなく、その前に心に憤りを覚えて興奮したのは、マリアや追悼に来たユダヤ人たちが、普段は神への敬虔な信仰を口にし、信仰的に立派な行動を行っているのに、いざラザロの死に直面すると、神との関係においてラザロの死を正しく理解しようとしていなかったことに憤りを覚えたのです。憤りを覚えたことで興奮したイエスが、涙を流されたのはイエス自身が個人的な心情で悲しいから涙を流されたのではないのです。そうではなくて、心に憤りを覚えて興奮したイエスが、38節によると、再び心に憤りを覚えて、墓に来られたとあります。このように、イエスは心に憤りを覚えたことが度重なって、身体的な反応で涙が流れたとしか考えられないのです。イエスの涙は、明らかに、普段の信仰生活では神との関係性において敬虔であるのに、いざ近い人が死に直面すると、神との関係性のことがおろそかになってしまう信仰者に対して憤っているのです。けれども、イエスが涙を流したことにどのような明確な²原因があるかはこのヨハネ福音書からは何もわかりません。

しかし、イエスがラザロをよみがえらせた本当の理由はイエス自身の41節以下の発言からわかります。イエスがラザロの墓石を取り除けさせると、神に対して「わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します。わたしの願いをいつも聞いてくださることをわたしは知っています」と、そのように神に対する信頼を祈ったイエスは、さらに続けて言います。「しかし、わたしがこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです」と言うのです。つまり、マリアやユダヤ人たちに対して、イエスが神から遣わされて、神の恵みの力がイエスを通して現わされることをユダヤ人たちに知らせるためであると言うのです。

これはイエスが神から遣わされた御子であり、イエスの癒しの業のすべてが、神と信仰者の恵みに基づいた関係性を象徴していることなのです。けれども、神との関係性において、この世の出来事を見ようとしなない信仰者は、イエスの奇跡の業をイエスの個人的な力やベルゼブルの力によるものとの外れに解釈し、神との関係性によってイエスの癒しの業を解釈することができないのです。

わたしたちも、今の信仰生活において自分の身に降りかかってきたことを単純に、幸いなこと、不幸なことと二分法で解釈するのではなく、それらの出来事を通して神の御心がどこにあるのかを見極めながら、日々の信仰生活を送っていきたいと思うのであります。特に、不幸な出来事の背後に神の御旨がどのように示されているかを見出す営みが、マリアのような信仰的なスタイルを身に着けることにつながっていくことを心に留めて歩いていきたいものであります。